

ちよっぴり息抜き*得点上乗せの古文基礎知識

〈第六回〉 古典世界の恋愛事情♡

○初冠(ういこうぶり) 伊勢物語第一段

昔、男、初冠して平城の京、春日の里に
しるよしして、狩にいにけり。その里にい
となまめいたる女はらから住みけり。この
男かいまみてけり。おもほえず、古里にい
とはしたなくてありければ、心地まどひに
けり。男の着たりける狩衣の裾を切りて、
歌を書きてやる。その男、忍摺りの狩衣を
なむ着たりける。

春日野の 若紫の すり衣

しのぶの乱れ かぎり知られず
となむ、をひつぎていひやりける。ついで、
おもしろきことともや思ひけむ。

みちのくの しのぶもじずり 誰ゆゑに
乱れそめにし われならなくに
といふ歌の心ばへなり。昔人は、かく、い
ちはやきみやびをなむしける。

○髪上げ(裳着で行う)

伊勢物語第二十三段

昔、田舎わたらひしける人の子ども、井
のもとにいでて遊びけるを、おとなになり
にければ、男も女も恥ぢかはしてありけれ
ど、男は「この女をこそ得め。」と思ふ。女
は「この男を。」と思ひつつ、親のあはすれ
ども聞かでないありける。さて、この隣の
男のもとより、かくなむ、

筒井筒 井筒にかけし まろがたけ

過ぎにけらしな 妹見ざるまに
女、返し、

くらべこし 振り分け髪も 肩すぎぬ

君ならずして たれかあぐべき
などと言ひ言ひて、つひに本意のごとく
あひにけり。

昔、一人の男が、成人し、平城京時代の都、春日の里に
縁があつて鷹狩り(鷹を使って獲物を捕まえる)に
出かけました。里には、とても若く美しい女姉妹が住ん
でいました。この男は、姉妹の姿をのぞき見してしま
いました。都だった頃に比べ、すっかりさびれてしまつた
この里には似合わない、美しい人だったので、そわそわ
して落ち着きません。男は着ていた服の裾を切り、歌を
書いて姉妹に送りました。しのぶずりという模様の服で
した。

春日野の里の生えたばかりの草(＝若く美しいあな
た)で染めた乱れ模様のように、私の心はこれ以上ない
ほど乱れてしまっています

と、大人ぶつて(成人したてのくせに)詠み、送りまし
た。しのぶずりの衣をちようど着ていたのがおもしろい
と思つたのでしょうか。「陸奥のしのぶずりのように心
が乱れ始めたのは、あなた以外の誰のせいだというので
しょうか」という他の人の歌のアイディアです。昔の人
は、成人したてでもこんな優雅なことをしていたのです。

昔、田舎で暮らしていた人の子どもたちは、井戸のそこ
ろで一緒に遊んでいましたが、大人になり、男も女もお
互いに恥ぢかしくなるようになってしまいました。それ
も、男は「この女と結婚したい」と思い、女も「この男
と結婚したい」と思い続け、親が持つてくるお見合いの
話も聞かずにいます。さて、隣に住んでいるこの男から
こんな歌が届きました。

一緒に背比べした筒型の井戸の囲いを僕の背丈はも
う越してしまいました。あなたと会っていない間に。(も
うあなたと結婚できるくらい立派に成長したよ)
女はこう返事しました。

一緒に比べ合った(こども用の)おかつぱの髪ももう
肩を過ぎてしまいました。誰との結婚の為に髪上げしま
しょうか、あなたの為以外にはしません。
とお互いに言つて、ついに念願通り結婚したのでした。

嘆きつつ ひとり寝る 夜のある間は
いかに久しき ものとかは知る
と、例よりはひきつくるひて書いて、**移ろ**
ひたる菊に挿したり。

「最近残業ばかりで会社に泊まり込みだ」といって私の所へ帰ってこなかったはずが、新しい女の所にいたのだった——
嘆きながら、一人ぼっちで寝る夜は、朝になるのが本当に遅いということを知りました(あなたといるとすぐ明けてしまう夜も、一人寂しいときは長く感じる)
と、いつもより真面目に(怒っているのが伝わるように)書いて、色あせかけた菊にその紙をさした。

○降嫁 源氏物語(若菜上)

「かたはらいたき譲りなれど、このいはけなき**内親王**、一人、分きて育み生ほして、さるべきよすがをも、御心に思し定めて預けたまへと聞こえまほしきを。」(中略)「かたじけなくとも、**深き心にて後見きこえさせはべらむに**、おはします御蔭に変わりては思されじを、ただ行く先短くて、仕うまつりさすことや**はべらむと**、疑はしき方のみなむ、心苦しきはべるべき」と、**受け引き**申したまひつ。

○三日夜の餅

落窪物語

あこき、この餅を箱の蓋をかきしう取りなして参りて、「これ、いかで」と言へば、君「いとねぶたし」とて起き給はねば、「なほ今宵御覧ぜよ」とて聞こゆれば、「なぞ」とて、頭もたげて見上げ給ふ。餅をかきしうしたれば、少将、誰かくをかきしうしたらむ、かくて待ちけると思ふも、されてをかきしう「餅にこそあめれ。食ふやうありとか。いかがする」とのたまへば、あこき「まだやは知らせたまはぬ」と申せば、「いかが。ひとりあるには食ふわざかは」とのたまへば、聞きて「**三つ**とこそは」と申す。「まさなくぞあなる。女は幾つ」とのたまへば、「それは御心にこそは」とて笑ふ。「これ参れ」と女君にのたまへば、恥ぢて参らず。いと実法に三つ食ひて、「蔵人の少将もかくや食ひし」とのたまへば、「さこそは」と言ひてあたり。

阿漕(姫の女房)が三日夜の餅を箱の蓋に綺麗に盛って来て「これをどうぞ」と申すと男君は「すぐ眠い」と言ってお起きにならないので「でも、今夜ご覧にならない」と申し上げると、「なに？」と頭をあげてご覧になる。餅が綺麗に盛っているので、誰がこんな用意を? こうまでして自分が来るのを待っていたのかと思って、「三日夜の餅じゃないか。食べ方があるとか。どうするか」とおっしゃると、阿漕は「まだご存じないのですか(まだ結婚していないの?他の人とは遊んでいただけなのね)」と申すと「どうして独身の私が食べるものか」とおっしゃるって尋ねると「三つ噛み切らずにお召し上がりください」と阿漕が申し上げる。「食べにくいな。女はいくつ食べるの?」と男君がおっしゃると「好きなだけです」と笑う。「これを食べなさい」と男君が女君に言っても、恥ずかしがって食べない。男君はまじめに三つ食べて、「蔵人の少将(男君の友人で、姫の異母姉の夫)もこんな風に食べたのか」とおたずねになると、阿漕が「そうでしょうね」と言う。